

《翻 訳》

ハリソン自伝（前篇）

ヴィクトリア朝のある女性学者の一生

ジェーン・E・ハリソン 著
齋藤 裕 訳

《REMINISCENCES OF A STUDENT'S LIFE》(1925)

Jane Ellen Harrison

(translated by Hiroshi Saito)

キーワード

ヴィクトリア朝 (Victorian Age), ケンブリッジ・ニューナム学寮 (Cambridge Newnham College), ヨークシャー (Yorkshire), フレイザー『金枝篇』 (James Frazer『Golden Bough』), テニソン (Alfred Tennyson), ギリシャの宗教 (Religion of Greece), ベルクソン (Henri Bergson)

解 説

これは《REMINISCENCES OF A STUDENT'S LIFE [一学究生活の追憶]》[Jane Ellen Harrison. London. 1925] の翻訳です。この自伝については、すでに戦前にそのあらましが日本に紹介されています [『思想』(昭和16年八月号)「ジェーン・ハリソンのこと」高坂正顕]。ハリソン女史への敬愛の念のこもった、なかなかつばを押さえた文章ですが、この「追憶」そのものが全訳されるのは今回がたぶん初めとなります。

ジェーン・E・ハリソン [1850-1928] は英国ケンブリッジ大学 [ニューナム・コレッジ] 出身の、ギリシアを中心とした古典、美術、信仰、芸術の研究家であり、後には母校ニューナムで古典考古学の講師を務めました。本文の叙述からわかるように、時は19世紀後半のヴィクトリア時代にあたり、彼女は英国の女性学者の草分けになるわけです。

代表作としてはデュルケーム風の社会学的解釈やフレイザーの神話・宗教研究の影響を受けながら、古代における社会と信仰の関係をとり扱った重厚な『ギリシア宗教研究序説』[1903] 『テミス：ギリシア宗教の社会的起源』[1912]

などがあり、とりわけ前者はギリシアの神話、信仰研究に画期的な成果をもたらしたものと評価されています。

ハリソンの柔軟で闊達な学風は古典学を核とした《古代学》とでも呼ぶのが似つかわしいもので、ギリシア文化が西欧文化の源流のひとつであることを踏まえ、そのギリシアに代表される古代人の生活、思想、社会の総体の解明に情熱が注がれていた点に何よりも特色があります。

二十世紀英国の代表的な古典学者であるコンフォードやギルバート・マレーといった人々は、彼女から途方もなく大きな感化を受けたのです。マレーは彼女のことを「学識と独創的な精神とそれに劣らない同学のものに対して惜しみなく分かつ際立った性格にめぐまれていた」と称賛しています。

この「思い出の記」には、そんなハリソンのヨークシャーでの生い立ちから、秀れた女性学者としての誕生とヨーロッパを股にかけた活躍、晩年のパリーでの隠遁生活へと至る、かなり波乱に富んだ人生模様が、少しのてらいもなく、率直そのものの口ぶりで語られています。が、それらの行間からもハリソンの人間としての魅力が浮かび上がってきます。さらにまた、当時の有名な文人や学者との個人的な思い出や

世紀末のケンブリッジ大学の知的雰囲気や時代の社会的・文化的背景の描写にも、なかなか興味深いものがあります。

なお、ハリソンの仕事の翻訳としては『古代芸術と祭式』[筑摩叢書/佐々木理訳]『ギリシアの神々』[ちくま学術文庫/船木裕訳]を紹介しておきましょう。

『ジェーン・ハリソン自伝』

——ヴィクトリア時代のある女性学者の人生——

一 章

《ヨークシャーの日々》

現在のわたしのロシア語とロシア全般への熱狂からすると、わたしの幼時の最初の記憶は《モスクウ》という言葉についてだったと思いたくなります。わたしにはモスクウ[モスクワの英語読み]は都市ではなくて、犬を意味していました——このニューファウンドランド種の老犬は、たぶんクリミア戦争[1853-56、聖地エルサレムの管理権問題をめぐって、南下政策の露と対抗するトルコ、これに加担する英・仏・サルディニア連合軍の間で起こった戦争、セヴァストポリ要塞の攻防戦・英国のナイチンゲールの傷病兵看護活動が有名、1856年のパリ条約で露の南下政策は阻止された]を記念して、そう名づけられたのでしょう。これで、この思い出の記の日付もあらかた分かっていますね。モスクウの犬小屋はうちの裏庭の大木の陰にあって、この幹からは明るいゴムの樹液がふきでていました。枝をさしのべる木にかけ寄って、まじかにあるその塊をさっと取り、犬に激しく吠えつかれないうちに引き上げてくるのは、わたしにとってぞくぞくするほど怖い楽しみでした。後になって、ある人々にとってはモスクウは大寺院のある都市で、犬ではないのだと知ったときには、わたしの宇宙はアインシュタインの相対性理論なみに動揺したものです。当時のわたしたちのまわりでは、ロシアと

いうのはツアーリ[皇帝]とシベリアの奇妙な残酷なロシアのことでした。わたしの最初のおもちゃは《セヴァストポリの包囲》という、煉瓦と兵隊がごちゃまぜの玩具で、これは愛国者の伯父から贈られた物です。兵隊や包囲戦やマスケット小銃や銃剣は嫌いだったけれど、セヴァストポリという言葉は、まだ子供のわたしの口には驚きであり柔らかな喜びでした。わたしはそれを何度も何度も思いめぐらしたものです。ずっと後になって、それがギリシア語源であって、どんな意味なのか[《威厳ある都市》]を知ったとき、まさしくピッタリのように思えました。

それから毎年クリスマスにはロシアが巡ってきました。わたしの父はロシアといくらか商業取引があったもので、毎年なにやらロシアの知人からキャヴィアやクランベリー[つるこけも、ジャムや鳥料理用のソースなどを作る]やトナカイの舌[タン]を詰めた籠が送られてきました。キャヴィアはもっぱら父の口に入ったけれど、たまには熱いトーストにその珍味を少量分けてくれました。そこでわたしは父からいささか美食の趣味を受けついたので。クランベリーは大人たちの晚餐として鹿肉料理のソースの材料になったものの、トナカイの舌の方はその一部がわたしたちの勉強部屋の朝食となって、そこで一人の太った食いしん坊が心行くまで味わうということになりました。ああ、あれらのトナカイのタンときたら！ トナカイの味がただけではありません。そればかりか、雪の原野と夢見る森林の味がしたものです。

父はまた小ぶりのロシア櫛[そり]を一台向こうから取り寄せました。そして、父はよくわたしを乗せてくれましたが、ありがたいことに一人乗りだったので、わたしは他人に煩わされずにステップとシベリアの原野、熊と狼どもを夢見ることができました。わたしの知識はすべて二冊の魅惑的な書物——『Near Home [家の近くで]』と『Far Off [遠く離れて]』によるものでした。それらの本が今あればと思います。とにかくわたしの頭の中は北も南もすつか

りごちゃ混ぜになっていました。それ以来、櫓に乗ったのは一度きりしかありません。かつてサン・モリッツ [S. Moritz スイス南東部の町] で一冬を過ごしていたとき、友人が死にました。

彼女の葬列は櫓の長い列でした。言いようもなく厳粛で静寂そのものでした。このわたしが死んで、もし海に葬ってもらえないなら、せめて櫓に乗って自分の墓に向かいたいものです。

ところが、ロシアはやがて影がうすくなり、後にはわが故郷のヨークシャー [イングランド北東部を占めた大きな旧州、古都ヨークには大聖堂がある] だけが残ったのです。ここでもって、告白しなければなりません。政治については、わたしは古い自由主義者 [リベラル] ですが、小イングランド人 [イングラダー] とボルシェヴィキの気質が少々交わっています。大英帝国は大嫌いです。なにしろ、それはわたしにとって、思想上退屈で有害なすべてのことを表わしているのです。それに、そこには常にまた必ず戦争の種子が含まれているのですもの。わたしは、ほとんどあらゆる種類の愛国主義に反対します。でも、自分の心の秘密の奥底を探ってみると、そこにじつに狭くて偏った地方根性 [パラキアリズム] を見いだすのです。わたしはヨークシャーの女であることに強い誇りを抱いています。

わたしの才能ある友人ホープ・マーリーズ [Hope Mirrlees 1887-1978 小説『Lud-in-the-Mist』(邦訳『霧の都』) 1926などの著者] は、『対抗策 [Counterplot]』という素晴らしい小説 [1924] を書いていますが、その中で、もしもわたしたちがいわゆる《人生》という経験のもつれを捕らまえ、理解するとしたら、それはただ芸術の形式においてのみ、あるいはそれによってのみであることを示しています。あるいは芸術の形式というかわりに、宗教の形式といってもよいかも知れません。なにしろ宗教は芸術の一種なのですから。『フロス河畔の水車小屋 [Mill on the Floss]』 [英国の女流小説家ジョージ・エリオット作の小説 1860 エリオット

トの第三作 タリヴァー家の兄妹トムとマギーをめぐる兄妹愛と恋愛の物語] という本の中であの《グレッグおばさん》に出会うまで、わたしは自分を知りませんでした。わたしは今ではグレッグおばさんそのものなのです。心底の尊敬の念からそういいます。わたしは世間に対して温和な世界主義的 [コスモポリタン] な礼儀と教養を装っています。考えとしては進歩的ですし、是非ともあらゆる現代の動向から遅れまいとしています。ところが、そうした裏には、厳然としてグレッグおばさんが、無分別なまでに保守的で、偏見でこり固まり、天然の土に根差した、あのグレッグおばさんが控えているのです。[イングランド] 南部人に言わせると、わたしたちヨークシャー人は排他的で、態度は荒々しく、精神は粗野で同情心に欠けるそうです。たしかに態度が荒々しいのは認めますが、人柄は口ほどに悪くはないんですよ。排他的ですって？ ことによると。でも、わたしはあるヨークシャーの婦人が「スコットランドにはかなり上品な人もいます」というのを聞いたことがあります。精神は粗野で同情心に欠けるとか。そうですね。わたしの女友達が、ヒースの生い茂る荒野の小屋に一人きり残されてしまったことがあります。夫と二人で夏の間借りしていたのです。日暮れにノックの音がしました。家主のおかみが小わきに大きな灰色の兎を抱えて入ってきました。「ご主人が出かけて、奥さん一人きりだと聞いたもんで、ひょっとして、寂しいんでねえか。兎をつれてきたんだ。ちっとは、おまえさんの相手にでもなるかと思ってな」このわたしもヨークシャーの小さな宿屋で友人にとり残されたことがあります。翌朝、宿のおかみが部屋をのぞき込みました。見ると、どでかい家鴨の死んだのを抱えています。「おまえさん、連れのお嬢さんなしで、寂しかろうと思ってな。ひょっとしたら、家鴨料理が好きでねえかと」わたしは好きだったので、あり余るほどの、味のよい付け合わせもろとも、胸肉の特大的切身を二切れも食べたものです。おかみはわたしの様子を見にくると「あいや、おま

えさん、ほんに少食だな。きつと南部もんのとこで暮らしてきたに違いねえ」その宿を後にしたときは、わたしは心からおかみにお礼を述べました。相手はこちらをまじまじと見つめて、こう言いました。「あんたじゃなかったかな、わたしが知っていたのはあんたの父様だよ。あのチャーリー・アリソンさんのためだよ」さて、わたしの父は「チャーリー」などと呼ばれたことはなかったのです。なにしろ、愛称で呼ぶにはあまりにごくよそよそしく、いかめしい人だったもので。おかみは文法学者のいわゆる——あるいは、かりに何か重要なものに気を配るときに用いられる——《主格》指小辞〔一種の謙譲によって相手を尊敬する言葉〕を使っていたわけです。それはたんにわたしやわたしのものに対する彼女なりの親切な気持を表現していたにすぎません。わたしどもヨークシャー人は感傷的ではありません。わたしはヨークシャーの詩集を偶然手に入れました。それには「春の賛歌」が収められていました。それはこう始まります。

《冬將軍》には、立退きの予告なぞするものか
奴はここを目茶苦茶にしたのだから

T'aud Winter e'got nawtice ter quit.

He made sooch a muck o'the place.

わたしどもヨークシャーの人々は、ロシア人と共通する別の気質をもっていると思いたいものです。わたしたちが他の何よりも嫌いな不道徳は気取りです。あるロシア人が他のロシア人を気取っていると非難するのに居合わせたことがあります。かりにそれがあったにしても、それはイングランド人の肉眼では見えないほど微小なものでした。まさにヨークシャー人そっくりです。あなたは〔モーセの〕《十戒》〔エホバへの信仰、殺人、姦淫、盗み、偽証、貪欲など旧約「出エジプト記」20章〕のうちのどんな掟を破ってもよろしい——それでも相手は充分寛大です。あなたがまあともな人物であれば、相手はあなたを許すでしょう。——しかし、あ

なたが見せびからそうとするや、いささかでもそんな印象を与えたら、あなたは終わりです。そうした連中には、たしかにわたしの同郷人は冷たく、厳しかったことは認めます。さる教区牧師〔Vicar〕が留守のあいだ、わたしたちの教区を担当しに南部からやって来た不運な牧師をわたしは思い出します。かわいそうなその男は改革の善意に満ち満ちて到着しました。「われわれの礼拝を輝かしいものにしよう」と意気込んでいたのです。そこでパンフレット類、新しい賛美歌集、それに膝掛け布団をもちこんで、その上に跪かすことをわれわれに強制しようとしていました。ところが、当地の《福音派》〔ここでは英国国教徒の低教会派。聖職の特権・教会の政治組織・儀式を重視しない〕の慣習では、連禱〔Litany 司祭の唱える祈願に対して会衆が唱和する形式のもの〕のあいだは楽な姿勢で屈むことになっていたのです。さらに、彼は聖餐台〔信徒に分かつための、イエスの血と肉とを表すパンと葡萄酒とを置く台〕に小十字架を置きましたが、わたしの父はみずからの手で素早く、静かに取り除いてしまいました。最初の日曜日、教会は満員でした。次の日曜日は、あらゆる「輝かしさ」にもかかわらず、うすら寒くがらんとして、数名の無愛想な顔があるだけでした。その新参者を好きではなかったけれど、わたしはその考え方には賛成でした。で、わたしは主立った教区民たちを誠実にまわって、なぜ教会にこないのか尋ねました。「あのやり方には同意しない」という答えが返ってきました。わたしは膝台と賛美歌集とパンフレットのことだなと思いました。「いやあ、文書とかそんなものは、彼のやりたいようにやるがいいさ。そんなことは問題ではない。だが、おれたちは、あのやり方には同意しない」その後の分析から、ヨークシャーでは「やり方」〔ways〕という言葉が、人のさまざまな反応の総体を示すということが分かりました。あなたのあれこれの行為は、あれこれの言葉と同様にヨークシャー人にはまず意味がないのです。ヨークシャーの人が賢明にも考慮に入

れるのは、彼がいみじくも言ったように、《あなた》、あなたの総体、《丸ごとの》あなたなのです。かれらは善悪をもっともらしく説明することにかけては、わたしよりも本能的に上手に育てられました。そこで、旧牧師の留守中に、いろんな変更をするのはまずいやり方だと感じたというわけです。3ヶ月持ちこたえた後、この改革者は以前よりも悲しいが、それだけ賢い南部人として、自分の土地に戻って行きました。

当時であっても、わが地方の人々は、すこぶる旧式で、田舎風だったに違いないと思います。わたしの記憶では、うちにしばしば遊びに来たある老紳士は、わたしの長姉の手にキスしては、相手を「ミストレス・エリザベス」と呼んだものでしたが、これなぞ一八五十年代ですら珍しいことでした [Mistressは婦人の名につける敬称、Mrs.はその略称。現在では既婚婦人の場合にMrs.として用いられ、未婚婦人の場合はMissが用いられる]。どんなにかわたしは誰かが自分の手にキスしてほしいと願ったことでしょう！ところが、わたしが年老いて、この礼儀正しいフランスに来るまで、誰一人としてそうしてくれなかったのです。そして、ミストレス・ジェーンについては——いや、わたしになりたくてたまらなかったのは、レディー・ジェーンでした。だって、わたしの憧れの的はジェーン・グレイだったのですもの。わたしは子供らしく魔術に惹かれる性質がありました。もしも《正確に》同じ名前が得られたら、わたしは同じ人になれるだろう。命名することは創造することなのだから。《「光あれ」と神が言った。》 [旧約「創世記」I：3-4]（彼はそう名付けたのです。）すると光があった。そこで、わたしはいつかレディー・ジェーンになれるかしらと、乳母に相談してみました。「ええ、もちろんですとも、お嬢さま」と陽気な乳母はこたえました。「いい子にしてらしたら、たぶん、」大きくなったら、立派な方 [ロード] と結婚して、レディーになりますよ。

やさしいジェーンはとびきりよい子、
いつでも言われたとおりにした。

それで、大きくなると、馬車を持った
とびきりの伯爵さまに嫁入りした。

Gentle Jane was as good as gold,
She always did as she was told.

And when she grew old, she was given in
marriage

To a first-class Earl who kept his carriage.

希望は明るく輝きましたが、わたしは用心深い子だったもので、もっと事情に明るい女家庭教師 [ガヴァネス] に質問してみました。自慢はペシャンコになりました。いえ、たといあなたが一ダースの立派な方と結婚しても、決してレディー・ジェーンにはなれませんよ。かれらがあなたのお父様を伯爵 [earl] にしてくれないかぎりね。（でも、そんなことまず不可能に思われました。）そこで、この夢は消えました。が、すっかり消えたわけではありません。それでも「宮廷のレディーたちが獵園 [パーク] に狩りに出かけるあいだに、わたしは自分のお城に居残って、プラトンを読むこと」ができたのです。ここで、わたしは自分の動機が見かけほど純粹にプラトンのものではなかったことを白状しなければなりません。子供時代、わたしが怖かったのは、いつか獵犬を連れて狩りに出かけなければならないということでした。獵犬は好きでした、ところが、馬ときたらとっても嫌いだった！今でもわたしは馬のどかい歯、飛び出た目、それにサテンのような肌が嫌いなのです。わたしは柔毛で覆われた長い耳、優しい穏やかな目をした、愛らしい驢馬 [ろば] に乗れる（とても下手ですが）ようになりました。そして、一匹の小さな柔毛の驢馬が何年もの間毎晩わたしのベッドで眠りました。ある晩、乳母がもう赤ちゃんのお年でもないでしようと言って、それを連れ去りました。わたしは一言もいいませんでした。ずっと前か

ら沈黙を守ることを覚えていたのです。ところが、真夜中になっても、わたしが目を腫らしたまま、じっと目を見開いていることがわかりました。乳母は物分りのよい女だったので、驢馬を戻してくれました。そこで、わたしは安らかな穏やかな眠りに落ちました。ああ！

やがて、わたしはシェトランド・ポニー〔ポニーは小形の馬。英国では5フィート以下のものをいう〕へと格上げになったというわけです。あのちっちゃな、まったくのいたずらもの。彼は一日中駆け出しては、宙返りをしたりして、こちらは一日中ファイリーの砂浜に寝そべっていたものです。彼は効果的にわたしの神経をなだめてくれました。なにせ、わたしは、当時から今に至るまで、運動面では弱虫で、勇敢な騎者の集まりでは不名誉的だったので。スウェーデンの療養所〔サナトリウム〕で、幸運にもリットン・ストレイチー〔Lytton Strachey 1880-1932 英国の伝記作家『ヴィクトリア朝著名人伝』『ヴィクトリア女王』氏に会うまで、わたしのことなぞ誰も理解しなかったし、誰も同情しなかったのです。わたしたち二人はそこでスウェーデン式マッサージを受けることになっていました。屈強な現地人によって施される、このスウェーデン式マッサージは《楽なこと》ではありません。「わたしの忠告に従いなさい」と彼はいいました。「かれらに手を触れられたらすぐに、あなたは悲鳴を上げるのです。そして、マッサージが終わるまで、そのまま悲鳴を上げつづけなさい」それは同情から出た、正しい忠告でした。わたしはそのとき初めて悟ったのです。ストレイチー氏がわたしの人間としての弱点に触れる、その指が、たといかに嚴重であれ、どんなに優しいかということ。

わたしの宗教的なしつけは妙に混乱したものでした。父は信念を明確に述べることはできませんでしたが、どうも実のところは、「宗教に対して大いなる崇拝を抱いている。もっとも、それが紳士の個人的生活に干渉しないかぎりだが！」と述べた。かの著名な政治家に共鳴した

のだらうと思います。堅信礼〔幼時洗礼を受けた者が、成人後に信仰を告白して、正式なキリスト教信徒となる儀式〕の後、わたしたちと昼食を共にしていたヨークの大主教〔Archbishop 県と州のカンタベリーとならぶ英国国教会の二大主教〕が、わたしが村のオルガンを弾いたと聞かされて、わたしの頭に手を乗せて、「そなたの大いなる才能を神に捧げる」ように命じたときの、父の当惑した顔付きときたら忘れられません。その大主教はわたしの子供心にはすてきな人でした。わたしは彼の儀式用の祭服とゆったりした袖がとても気に入りましたが、ある日わたしの義兄弟〔腹違いの弟〕の書齋をのぞいてみて、《apparitor〔大主教の権標奉持者〕》がこれらの衣服を整えているのを見てしまいました。ああ！ その袖はほんとうの袖ではなく、とり外されたのです。こちらの関心に気をそそられて、彼は親切にそれらの袖がどのようにホックで留まるのか見せてくれました。化けの皮ははがれたのです。さて、父のことに戻って。大主教はともかく努力していました。ところが、ある福音派の牧師ときたらひどいものでした。ある日彼は暇乞いにわたしらの家を訪れました。そして、別れしなに、わたしたちがみな、旅行にでかける際に跪いて「祈りの言葉を述べる」かどうか尋ねました。わたしは父の冷ややかな嫌悪の顔つきを思い浮かべられます。自分自身の家において、礼を失するわけにはいかなかったのです。そこで、腰をおろすと——父は決して跪きませんでした——怒った顔を片手で覆って、その老いた牧師が祈るのにまかせました。それから、鄭重に相手をドアまで見送ると、なにやらつぶやきながら戻って来ました。わたしには「無作法な」という言葉しか聞き取れませんでした。父はかなりきちんと教会に出かけましたが、わたしたち子供らは、《聖餐式日曜日〔サクラメント・サンデイ〕》と呼ばれる日には、父に軽い腰痛の発作がよく起こることに気づいていました。しかも、それは月曜の朝には消えてしまうのでした。

さて、わたしの継母はまったく別の気性でし

た。彼女はケルト人で、その宗教は熱烈な半—信仰復興運動風のものでした。誠実な婦人であって、初めは自分の生徒、後にはまま娘として紹介された三人のかなり気むづかしい少女たちに、たしかに、おのれの義務を果たそうと努めました。毎日曜日わたしたちに聖書の授業をしました。彼女の主な教義は、われわれは「ふたたび生まれてくる」に違いないこと、「神はわれらが心をまるごと嘉〔よみ〕するか、あるいは皆目嘉しない」ということでした。これはまったく公正とはいえないと、わたしは早くから感じていたようです。どうして、もしわたしたちが神のみに心を寄せるなら、神はみずからの喜ばしい世界を、魅力的な外国語の数々で満たしたのだろうか？ とにかく、わたしが誠実に企てた犠牲はまったくの失敗でした。わたしは最初から救いがたい俗物だったのです。しかし、宗教の仕組みはわたしの興味をそそりました。日曜は辛いにしてもわくわくさせる一日でした。わたしは《日曜学校》〔18世紀末に英国で始まった。日曜日に児童を対象に、聖書や信仰について学び、礼拝を行うために教会が開いた学校〕で二回教え、十二の年から二つの礼拝〔サーヴィス〕でオルガンを弾きました。ラテン語で祈りの言葉を、ドイツ語で授業を、ギリシア語で福音書を理解しました。しかも、この《行為》の誠意についていくばくかの疑惑を抱きつつ。わたしらはいつも記憶を頼りに説教の一つを書き上げなければなりません。そのために、わたしには悪癖が身に着いてしまいました。それは集会や講義でたまたま自分が耳にするどんなたわごとにも熱心に傾聴することです。わたしの友人たちがずっと楽しそうに眠ったり、あくびをしたり、互に肘でつつきあっているのを横目に見ながら、わたしの注意は話し手に釘付けになっているのです。

毎日曜日、わたしはその日のための特禱〔Collect 会衆の集まったとき特別の場合に用いられる短い祈禱文〕、それに〔新約の〕「使徒の書簡」あるいは「福音書のいずれか」を学びました。お気に入りの特禱は降臨節〔クリスマス

前の約四週間〕の第一日曜日のためのものでした。それは今でもわたしをぞくぞくさせます。でも、わたしを一番喜ばせた賛美歌の類が、ひどいへボ詩なのを見ると、実はほんとうの文学趣味をちっとも持ち合わせていなかったに違いありません。

わたしの好きだった寓意歌は次のように始まります。

わたしたちには、なんて誇らしく、なんて楽しいことか、

自分の衣服を見せて、豪華で新しいと呼ぶことは。

貧しい羊と蚕がまさしくその衣服をずっと前に身につけていたのだもの！

How proud we are, how pleased to show

Our clothes call them rich and new,

When the poor sheep silkworm wore

That very clothing long before!

一つには、おそらく、それは子供らしい心のうちに、紐とショールというヴィクトリア朝風ボンネットが似合っている、そんな老いた羊の楽しい姿をわたしが抱いていたためでしょう。が、主としてわたしを喜ばせたのは、およそあらゆる《上品〔シック〕》で粋なものに対するわたしの内なる、いまだに根深い嫌悪と軽侮の念を、それが表現していたためでしょう。たぶん、それは《晴れ着》にまつわるわたし自身の子供っぽい苦難によって引き起こされたある種のコンプレックスなのです。もっとも、それらの着物がそれほど質素なものだったかは保証の限りではありませんが。いずれにせよ、今でもわたしは申し分なく盛装した男なり女なりを見ると決まって、その人はさだめし馬鹿か、退屈な人物だろうと思ってしまうのです。われわれは誰しものが風采に威厳あるというわけにはいかない。でも、叶うことならせめて、誰もがみんなぼろの身なりでも、気持ちよくありたいものではないですか。あるケンブリッジの式典で、さるお方が総長だったときのことで、一度

わたしは故デヴォンシャー公爵 [デューク] の姿を感嘆の念を抱きつつ見つめていたことがあります。彼の右の半長靴 [ブーツ] には大きめの穴が空いていて、そこから灰色のウールの靴下が覗いていました。それはまさに伯爵らしいと感じたものです。わたしは同じ眼差しを富者そのものに向けました。ミス・パーネル・ストレイチャー [Miss Pernel Strachey] がこんな質問をしたのを覚えています。「金持の人々って、なぜみんなこうもつまらなくなってしまうのかしら？」今やミス・ストレイチャーはニューナム [ケンブリッジの女子コレッジ、1875年設立] の総長なのですもの、彼女が余暇の一時を聖書を読むのにあてることを期待します。「金持が神の国に入るより、らくだが針の穴を通る方がむしろやさしいくらいだ」[新約「マルコ伝」10: 23-27]「神の国」の代わりに「より高い精神的価値の国」と読めば、おのずと彼女は答えを得るわけです。

わたしの [世俗的な] 普通教育は、十七になるまでずっと、かなり気ぜわしく代わる一連の女家庭教師 [ガヴァネス] たちの手に委ねられていました。彼女らはいずれも厳密に英国人でした。父親の信念は単純なもので、それは《あらゆる外国人は教皇崇拜者 [パピスト] [カトリックに対する蔑称] であり、あらゆる教皇崇拜者は嘘つきである》というものでした。そこで、父は「自分の家に外国人を入れようとしなかった」のです。どんなに長い期間、いかに熱心に、わたしは教皇崇拜者を見たいと願ったことか！ でもそれは叶わなかった。持前の単純な信念の結果、父はこの世で決してフランス語を話すことができないことになりました。「花嫁教育を仕上げる」べく、チェルトナム [レディース・コレッジ 1854年、パブリック・スクールであるチェルトナム・コレッジの姉妹校として創設された一流の淑女校] にやられたとき、わたしは三、四の言語が読めて、《Noel et Chapsal [不詳 クリスマス・カロルの一種か]》を空で知っているというので、即座に上級第一クラス [アッパー・ファースト] に編入されま

した。わたしの最初の朝、フランス語の先生が簡単な「dictée」[口授による書き取り] を課しました。孤立した単語はいくつか分かりましたが、一文として意味を取ることはできません。わたしは白紙を提出して、声を上げて悔し泣きました。女の家庭教師や先生はどれもみな無知でしたが、善良な女性で、一貫してわたしに親切にしてくれました。彼女らがわたしに教えたのは、立居振舞いを、つまり、部屋への入り方、馬車の乗り方、さらに《少女というものは姿を見せても、口を利かないのがよい》[Little girls should be seen and not heard.], そして、わたしは「質問をするためでなく、学ぶために」そこに (学校の教室) にいるのだということなどでした。日曜日ごとに、わたしたちは聖書の各篇を正しい順に唱え、イスラエルとユダの国王名 [旧約「歴代誌」「列王記」など]、[牡羊座から魚座までの] 黄道十二宮、度量衡表を繰り返しました。わたしはまた奇妙な記憶術によってたくさんの孤立した年代日付を暗唱したものです。今でも世界創造、[アダムとイヴの] 墮落、ノアの大洪水、ケベックの戦い [英国によるケベック条例発令 (1774年) をきっかけとする英米の対立・戦闘のことか]、[ウィリアム・ハーヴェイ (1578-1657) による] 血液循環の発見の日付を正確に述べることができます。

ヴィクトリア朝時代 [1837-1901] の教育の非実用的なことときたら、巧妙を極めたものでした。毎日一時間をかけて、ごく精緻な刺繍の練習をやったというのに、わたしは簡単な服一着もろくに作れやしない。それでも、中には心から感謝していることもあります。わたしは十五年ものあいだ毎日欠かさず聖書から三節を覚えさせられました。なんならお望みの詩をなんなりと取り出すこともできますよ。こうして、わたしはミルトン [John Milton. 1608-74 英国の大詩人『失樂園』]、ワーズワース [William Wordsworth 1770-1850 英国の湖畔派の詩人。『抒情民謡集』『序曲』]、ヘマンズ夫人 [Mrs. Hemans, Felicia Dorothea, 1793-1835 英

国の女流詩人]の多数の作品、グレイ [Thoms Gray 1716-71 英国の詩人]の《哀歌 [エレジー]》、《シヨンの囚人》[英国の詩人 George Gordon Byron バイロン作の詩 1816]などをより好みなく覚えました。それらはみな背板に横たわって覚えたので、この日に至るまで、わたしの背骨は裁縫師の称賛の的となっているのです。近ごろは、わたしの若い友人たちの丸い背中を見ると、そしてかれらがまるで犯罪人で、英国の貴婦人でないみたいに、こそこそドアを抜けるのを目にするにつけ、ことに年上や目上の人たちに話しかけられても起つことができないときなど、わたしはいくらか《立居振舞い》に未練を感じることもありますが、でもやはり、わたしども過去の世代の者は、自分たちの価値を押しつけてはいけないように、自分たちの行儀作法を押しつける権利はないのです。わたしの所へティー [昼食と正餐との間の軽食付のお茶、午後四時から五時ころにとる]に招かれた若者が初めてやってきて、絨毯の上に長々とねそべるのを見ると、さすがに、いささか驚かさされます。が、そうすることで若者は打ち解けた関係を望んでいることを表わしているのですし、ハットを片手に、椅子の端にかしこまって座るのより、ずっと気楽な雰囲気になりますものね。それからまた、ケンブリッジで、わたしがある若者を初めてティーに招いたとき、彼が《葉書》で返事をよこしたのには、いささかびっくりさせられました。「できれば伺います。でも、当てにしないで」彼を「当てにする [count on]」ですって、なんて無粋な人でしょう！ わたしは彼の名前（ちなみにある貴族の方ですが）を住所録から抹消しました。でも、その日の晩——自分が腹を立てたのを懺悔して——わたしはその相手に《葉書》もって、別の日曜日に「あなたを当てにできたら」よいのですが、と書いてやりました。さて、それから事情はごく急速に変わります。一つの世代の無作法は次の世代の洗練された《決まり文句 [cliché]》なのです。わたしが若い時分、「すみません [sorry]」とって謝ることは、自分

自身を店員並ににおとしめることだった——当時の『パンチ』[Punch]誌がなによりの証拠です——のかもしれませんが、今では「すみません」という言葉がとびきり名門の方の口からごく気軽に洩れるのを耳にします。ヴィクトリア時代風の教育の馬鹿馬鹿しさときたら、わたしはたしかに雑多なたわごとをどっさり学びました（もっとも、黄道十二宮は擁護するつもりです）が、珍妙な断片的知識は子供の創造力を刺激するものです。近ごろでは、学ぶのは合理的にして、適切なことばかりのように思えます。かつて、わたしは若い友人と一緒にローマへ行ったことがありました。それは最新式の教育を受けて、ケンブリッジで歴史の優等をとった者です。最初の朝、食卓に出たバターの小塊に、双子の印がついていました。「なつかしのロムルスとレムス [ローマ伝説の雌狼に育てられた双子児、ロムルスはレムスを殺して、ローマの建国者となる] ね」とわたしが言うと「なつかしの誰ですって？」という返事が返ってきました。彼女はその双子のことを聞いたことがなく、わたしがその物語を話して聞かせても、まるでうんざりしていました。かれらは《立憲政体史》[英国の有名な歴史家 William Stabbs 1825-1901の著書]には場所を占めておらず、彼女にすれば、ローマの神殿の古い狼は空しく吠えただけだったのです。「偉大なる神よ！ わたしはいっそ……」

わたしども老いた者は、それでも、若者が老人よりも正しいだろうという事実から目を背けてはなりません。しかも、これは道徳と礼儀ばかりか、文学でもそうなのです。もしわたしたち老いた者がその背後により大きな個人的経験をもっているとしたら、かれら若者たちはその背後に、さらに加わった一世代全体の集合経験ををもっているわけです。若者は年輩の双肩なる有利な位置から人生を始める。そうして、その展望はより広く、よりはっきりしています。シェパード氏 [Hugh Richard Sheppard 1880-1937 カンタベリー大聖堂参事会員・平和主義者か]が述べたように、「父親たちが、理

性の時代がやっと達成されたと考えるとき、息子たちは、もしかれらが立派な家柄ならば、それからずっと先に行っているから見なしても大丈夫であろう」わたしは個人的な告白をしたいのです。現在のジョージ朝時代 [ジョージ5世の時代 1910-36 この自伝は1925年に最初に出版された] の小説家たちの方法は、しばしばわたしをひどく悩ませたものです。わたしは常々、芸術は精選されたものだと考えてきました。ある安らぎと大きさを期待して、それを眺めたものです。ところが、わたしが『ユリシーズ』 [『Ulysses』 ジェイムズ・ジョイス作, 1922] を取り上げてみると、このわたしが、ゾラさえ赤面させるような猥褻物の掃きだめの中をのたうちまわっているばかりか、わたしの神経をいらだたせる平凡瑣事——わたしが精神分析医の相談室で、個々の考え、個々の印象（いかにそれらが些細であれ、またいかに一見無関係であれ）を他人に打ち明けずにはいられない患者と向き合っていると錯覚させるような平凡瑣事——の細流に身を浸しているという気がしてきました。でも、その間じゅうずっとこう感じていたのです。「この作品は天才の書いたものなのだ、わたしがそれを非難するなんて、おこがましいわ。まず初めに彼を理解するようにしよう」「精神分析医の相談室」そう、その確信はいや増しに募るのでした。ジョイスは潜在意識を聞こえるように、意識の表にのぼせようとしているのです。人格の大いなる深淵を浚っているのです。それは彼の巨大な貢献です。その後を、さほど才能のない一群の模倣者たちが続きます。それから、幸運なことに、わたしは《ベネット氏 [Mr. Bennet] とブラウン夫人 [Mrs. Brown]》 [ヴァージニア・ウルフの評論. 講演は1924年. 1910年ごろを転換期と捕え、ベネット、ゴールズワージー、ウェルズに代表される旧来のエドワード朝 (1901-10) の文学を、人間の状況の描写に偏り、その性格を表現していないと批判し、一方ジョイス、フォスター、ロレンスなどのジョージ朝 (1910-36 とくに25年頃まで) の新進の文学の可能性を擁護した] を

読みました。そして、ウルフ夫人 [Mrs. Virginia Woolf 1882-1941 英国の女流小説家. 意識の流れを重視した. 『ダロウェー夫人』『灯台へ』] の作品のお陰で、わたしはこれまで非現実的で、厄介だとさえ思っていたジョージ朝の登場人物が、まだ読んでみる前から親近感と精神性をまざまざと帯びるようになりました。そこで、わたしは報われたのです。かといって、いつもうまく行くというわけではありません！ 小説を楽しみながら寝につく場合、わたしが携えていくのは、ジョイス氏の本だということではありません。違いますとも、それはジェーン・オースティン [Jane Austen 1775-1817 英国を代表する女流小説家. 代表作『高慢と偏見』『マンズフィールド・パーク』] かジョージ・エリオット [George Eliot], あるいはトロロープ [Trollope Anthony 1815-82 英国の小説家『Barchester Towers』 1857] のことさえあります。でも、少なくとも、このわたしはどこかに到達すると知っています。《新しきエルサレム》 [天の都のこと. 「ヨハネ黙示録」 21-2章] の門はこのわたしにも少しは開かれているのです！

さて、わたしの女家庭教師たちに戻って。一人だけ著しい例外がありました——ほんとうの知性を持った女性であって、無学ですが、わたしの望むことは何でもかんでも熱心に学ぼうとしました。わたしたちは二人でドイツ語、ラテン語を（しゃにむに、しかも、まったく間違った課程の分量で）、ギリシア語聖書、さらに少々のヘブライ語までも読むことを学びました。運の悪いことに、指導者がまるでないのに、わたしたちはなかなか難物の「詩篇」からやり始めたのです。わたしは「あるいは、そなたの鍋を茨 [いばら] で熱くされたとせよ、さすれば、生であるものごとく義憤をして彼をいらだたせよ」というような、しごく曖昧な、わくわくする詩篇の意味を明らかにしたいと思いました。ところが、ああ！ わたしの親切な女家庭教師は、間もなく精神病院に移されてしまいました。彼女の精神的破滅にわたしがどれ

だけ加担したか、それを尋ねたくはありません。

わたしのギリシア語聖書研究に強烈な刺戟を与えたのは、新しい牧師補の到着でした。オックスフォードを出たで、見せびらかすのが嫌いだったようです。その説教の一つで、彼は軽率にも誤訳の箇所注意了。これはわたしを興奮と驚愕で満ちました。わたしはたちまちにして《聖書の言葉の靈感》が問題になっているのだと悟りました。その午後、わたしはギリシア語聖書を日曜学校まで持って行くと、さらに説明を求めようとして、不運な牧師補 [curate] を待ち伏せしました。すぐに彼のギリシア語の知識は、かりにあるとしても、わたしよりも乏しいことに気づきました。けれども、当惑したにせよ、彼は親切でした。ああ！ あの牧師補が心遣いを払ったのは、ギリシア語のテキストだけではありませんでした。わたしはまったくの恥さらしとして、即座にチェルトナム [レディーズ・コレッジ] へ送られたのです。継母はわたしの振舞いは「台所女中みたい」だと言いました。あの牧師補との会話の話題をつらつら考えてみても、わたしにはそのあてつけが腑に落ちないのです。父は例によって何も言いませんでした。これまでもほとんど何も言わなかったのです。その生来の大の寡黙ぶりは——それは父からわたしに受け継がれましたが——継母のなかなか猛烈なケルト風多弁によって度を強められたように思います。「母さんは憤然としてまくし立てる」と彼女の息子の一人が語ったものです。わたしは一度隣の部屋で、わたしの父に向かって熱弁をふるう彼女の声を聞いたことがあります。彼は音一つ立てませんでした。ところが、ディナーに集まったとき、わたしの母の肖像画が（長いこと屋根裏部屋にうちやられていたのですが）父の席の向かい壁にかかっているのを見て、わたしたちはいささか面食らってしまいました。自分でわざわざ持ち出してきて、掲げたというわけです。父の沈黙の報復はそうしたものでした。わたしを生むと母はすぐに死にましたが、ただ

もう優しくて穏やかな、無口の女性だったと聞いています。

わたしが通学するまで、書籍はきわめて入手が困難でした。父の学生時代の書籍はどういうわけか消滅していました。わたしは自分のお金をためて、ウェルギリウス [つまり『アエネイス』のこと] の古本を一冊買いました。それまでには長くかかりました。というのも、わたしの収入は週六ペンスで、宣教師たちのための強制割り当てからくすねたものだったからです。『アエネイス』のわたしの版は、韻律法に関してまるで手引きが載っていませんでした。その詩は六歩詩格 [ヘクサミター] で書かれていることは知っていました。が、わたしは《鼻音語尾の省略》でたえずつかかりました。もう絶望しかけていたとき、学校で韻文を作る級に進んだばかりの男友達がわたしに、その生徒の表現によれば、「どうしたらうまくやれるか」そのこつを教えてくれたのです。彼の説明はまさしく天の啓示であり、わたしは有頂天になりました。ところが、彼は最後にこう述べたので、わたしはいささかがっかりしてしまいました。「それはまったく馬鹿げたゲームさ。でも、きみも四年になったら、それをしなければならぬんだよ！」後になって、この同じ少年がチェルトナムの学校 [コレッジ] でわたしを大変不面目な立場に置くことになったのです。わたしは当時女性に開かれたばかりの《ロンドン大学入試試験 [マトリキュレーション]》 [1868年ロンドン大学、初の女子受験認可] に備えて勉強していましたが、彼はその試験の直前にわたしに手紙をよこして「わたしをはげまして」くれました。わたしの手元には一通の手紙も届きません。ところが、ある朝ミス・ビール [Miss. Dorothea Beale 1858-1904の間チェルトナム・レディーズ・コレッジの名物校長] の王座に呼びつけられました。下級生 [ロー・スクール] が祈祷に入る前に、彼女は自室で盛装して座っていたのです。彼女は葉書を手にして（ちょうど葉書が発明されたばかりのころです）、それには男子生徒の乱暴な筆跡で《ペ

ヴェリル [Peveril]》と署名されていました。「それは」と彼女はその署名を忌まわしげに指し示しながら「男の子の名前です」「ええ、ペヴェリルですわ。あの人は試験の前にわたしに手紙を書いてくれると約束したのです」そして、わたしは葉書に手を伸ばしました。「いいえ、これはあなたのご両親にお届けしなければなりません」それから長い熱弁が繰り広げられました。それはこんな言葉で終わりました。わたしの興味をひどくそそったので、一字一句覚えてあります。「ひどく俗悪なそんな手紙やそれによってもたらされるような恐ろしい結果を理解するには、あなたは若すぎますし、まだ無邪気すぎることを望みたいものですね」わたしはまったくもって、当時も現在も、その犯罪とされたものに賛成ですが、どうお思いになりますか？ 彼の「Peveril」という署名の後には「受験者たちによろしく！ [Give my love to the Examiners !]」と書かれていたのです。この話はヴィクトリア時代中期の女学校というものが——最高の学校でさえ——陥っていた愚かしい上品ぶりの極みの証拠となるでしょう。その手紙が勝手に読まれたことに、あんまり腹をたてていたもので、わたしにはもう他のことなぞ考えられませんでした。田舎では、こと手紙については細かな社交作法がはびこっていました。わたしは一束の手紙を村のポストまでもって行くのを許されたことを記憶しています。わたしは時間をかけて、さまざまな名前、本のタイトル、敬称、住所を空で覚えました。帰ってくると、それらを繰り返しました。わたしの勤勉と正確さを褒めてもらえるものと期待したのです。あにはからんや、わたしは不名誉なことをしでかしたと言われました。その後二度と、いかなる事情でも、わたし自身に宛てられたもの以外、手紙の住所を読むことはできませんでした。《時勢ハ変ハリヌ》。わたしの知っている著名な家族では、家族の全員が家の中に置いてあるすべての葉書と手紙を読む習わしになっています。わたしが家に帰ると、父がわたしを呼び出して、例の葉書を指し示しながら、こう言い

ました。「わしがそれを読むようにとミス・ビール先生が言ったぞ」「そうしてもちっとも構わない。でも、彼はお父さんに書いてくる筋合いはないことよ、ほんの子供ですもの」葉書は革新であり、あらゆる革新は呪われたもので、ご法度だったのです。娘たちに求婚した少年、若者はみな、父にとっては《若造》でした。こうした犯罪を決して犯さなかった、そこで彼はすっかり許されたと付け加えることは、もっぱら《ペヴェリル》のためです。ペヴェリルは今では州の大物となり、治安判事 [Justice of the Peace] [一般の治安維持に当たる下級裁判所の裁判官、民事・刑事の軽微な事件を審理し、重罪の予審を行う、結婚公認権・証人の宣誓確認権などをもつ、元来は無給で、弁護士の助言を受けて裁判を行う] にして『スペクテーター [Spectator]』誌 [1828年創刊の英国の週刊誌] の——いや、たしか『ネイション [Nation]』誌 [1907-30 W. H. マトンガムの創設した週刊誌、のちに「ニュー・ステイツマン」に併呑された] の常任校閲者 [Constant Reader] なのです！

このわたしも治安判事なんですよ。これはべつに自慢からではなく、まったく謙遜からいうのです。なにしろ、治安判事としてのわたしの短い経験はとてつもないものになりましたから。できれば、若い男女がみんな、こうした経験を——二年間積んでもらいたいものです。それも、六十になるまでに。それからでは善良な市民になるには遅すぎますからね。でも同時に、わたしは判事席ではからきし役に立たなかったと申し上げられます。わたしの頭はまるで実務に不向きで、的外れなことばかり述べがちなのです。ある率直な友人に言わせると、わたしは「芸術と文学を代表して」選ばれたのだから、それゆえにわたしに期待されているのは、もっぱら優雅な怠惰だけなのだそうです。それでも、わたしはある貧しいアルメニア人を助けたことを、うれしく思い出します。その男はどうしてか身分証明書をしくじってしまったので

す。アルメニア語という、たぶんヨーロッパ語の中でも一番難しい言葉が話することができる人物に、あらゆる配慮が与えられるべきだとわたしは感じました。それにまた、わたし自身の身分証明書はどうでしょうか？ ごく適度な量の役所風手続きでも、わたしは「かんかんに腹を立て」やすいのです。でも、わたしはどうにかパスポートの記入欄に書き込み、自分の目、鼻、額、それに風采全般について記述することができます。ところが、パリ警視庁によって母方のお祖父さんの生地を尋ねられたらあなたは一体どうできるでしょうか？ かりに真実を話して、自分はそんなこと知らないし、知りたくもないと答えたら、あなたはフランス共和国の意志によって拘留され、ポーランド系ユダヤ人の列に何時間も並ばされ、ランチもとれないことでしょう。唯一の堅実な方法は、何やらあいまいなヨークシャーの村の名前を書き入れることです。それを係官は読むことができず、ましてや発音することもできないでしょうから、それで役人根性も満足することでしょう。かのアルメニア人が苦し紛れにしたのは、どうもそんなことだったような気がするのです。いずれにせよ、わたしは彼を釈放しました。

わたしらは、もちろん、退屈な時間を過ごしました。主として〔自動車の〕スピード違反の大学生に罰金を課すことに費やされたのです。もしあなたご自身が二度はねられた経験があれば、相手を罰することにも最初は猛烈な喜びを感じずるでしょうが、やがて復讐にも飽きが来るものです。概して、弁解をしようという試みはありませんでした。学生はまず面白がって、それから、愉快そうに自分の——つまりその父親のお金で、絶えず厳格さを増加する罰金を支払いました。ある陽気な精神の持ち主が、わたしの記憶によれば、長い、苦しい弁解を始めました。それはこちらには分からぬ専門語、なにやら奇妙な最新のスラングで表現されました。そこで、わたしは熱心に貴重な言語学的ノートをつけ始めました。ところが、主席治安判事ときたら、言語の魅力に鈍感な冷酷無情な男でし

た。そこで、そっけなく学生に向かって、発言をキングズ・イングリッシュに制限するように要求したのです。かわいそうに、その少年は哀れっぽく周囲を見回して、言いました。「はい、先生、わかりました」そして、意気消沈してしまいました。

告訴の多くはささいな窃盗事件でした。最初、これにはひどく当惑したものです。被告が恥辱の苦痛を味わうのではないかと思って、わたしは相手を見ることに堪えられませんでした。やがて、わたしの当惑は不必要であると悟りました。恥辱は感じやすい人間性の持つ高い特権なのです。これら哀れな連中は、無情な犯罪者であるがゆえに恥知らずなのではありません。ただあまりにも愚かなために、恥辱を感じなかったのです。かれらは大部分が道徳的に愚鈍でした。つまり、これらの事件は法律の問題ではなくて、高利貸あるいは心理学者の問題でした。ある哀れむべき事件のことを覚えていますが、それはかなり知能があるものの、いささか涙もろい男でした。わたしたちはそのみじめな過去を調べなければなりません。男は職を得ようと絶望的な努力を重ねたこと、時たまありついた仕事も飲酒で失われたこと、それにささいな窃盗の繰り返しという類のことを、わたしたちに語りました。ここ何年もの間、ますます低い境遇へと落ちて行ったのです。「それから、戦争がやってきた。それはちっと幸運だった。すぐにおれは職を得て、仕事についていた。それから」と彼は悲しげにつけ加えました。「くそ忌まわしい平和がやってきた。そして、やつらはおれをほうり出した」たしかに、高遠なヴェルサイユ条約を非難する意図なぞなかったのです。ただ彼は仕事を失ったという、それだけなのです。判事はみんな首をうなだれたと思います。これがわれわれ、その支配者たちが作った世界のありのままの姿だったのです。

誰にも英国の裁判官が女性に不向きな役職であると思わせてはいけません。ある日、警官によって、その刑事被告が汚い言葉を使ったとい

う報告がなされました。「何といったのかね？」と治安判事が尋ねました。「はい、判事殿。それはほとんどわたくしが繰り返すのとはばかられます」とその警官が答えました。書記は、自分が「その言葉」をタイプさせましたので、もし判事一同が要望するなら、その写しを一部差し上げましょうと付け加えました。判事一同がじっさい要望したので、それは回覧されました。わたしにとって未知のことは常に抗いがたい誘惑でした。それに、一生を通じてわたしはほんとうにひどい言葉はどんなものか知りたいという好奇心を抱いてきました。家の馬小屋で、時折「ちくしょう、くそ [damn]」という言葉が馬丁の口から洩れるのを聞いたことがありましたが、それはさほど有益ではありませんでした。今こそ千載一遇の機会です。書類がすぐ隣の老紳士まで来ました。わたしは待ち兼ねてほとんど手を伸ばそうとしました。父親のように身を乗り出して、彼は言いました。「あなたはきっとこれをお読みになりたくはないでしょう」わたしは是非ともそれを読みたかったのですが、六十年にわたる性的卑屈さが効き目を現わしました。わたしは無理に恥ずかしげな顔を作るや、目を伏せていました。「ええ、そう！ そうですとも。どうもありがとうございます」騎士道精神に燃えて老人は会釈すると、その写しを懐に収めてしまいました。わたしの常々の知見から、われわれは英国人は人が良く、気楽な国民で、穏やかな自信を抱き、軽々しくは立腹しないものだと思ってきました。ところが裁判所でわれわれは何かいささか違う存在だと悟りました。どの公務員も、主席判事から警官まで、被告に対して変わらぬ丁寧さ、真の配慮、さらに思いやりさえ抱いていました。ただ一度だけ、わたしは弁護士が少し怒りだして、被告をいささか詰問するのに立ち会ったことがあります。が、法廷の雰囲気はそれに反対なのは歴然としていたので、かれはたちまち意気阻喪してしまいました。負け犬をいじめてはならぬことだったのです。

けれども、これはすっかり先走りすぎました

ね。さて、チェルトナムに戻って。わたしは《ベヴェリル》の手紙に落胆せずに、ロンドン大学の入学試験の試練に直面しなければなりませんでした。当時、試験は目新しいものでした。[チェルトナム] コレッジの名誉がすべて自分の双肩にかかっているような気がして、わたしはすっかり上がってしまいました。死ぬまで、わたしは大学の事務局長をやさしい気持ちで思い出すことでしょう。わたしが入って行く前に、かれはわたしの名前を尋ねました。ところが、わたしはそれが思い出せません。頭がからっぽになっていたのです。かれはとても優しくこちらを見て、いいました。「ああ、それは全然重要ではないよ。ひょっとして、またあとでね」そのあとで、かれはわたしがどうしているか様子を見に、講堂に入ってきました。そこで、陽気に答案を書いているわたしのすがた認めたのです。

わたしはチェルトナム [レディーズ] コレッジから、歴史に対する嫌悪を持ち越しましたが、これは一生ついて回りました。わたしらの受けた歴史の授業はもっぱら国王と貴族の行為と非行についての道徳的解説からなっていました。ステュアート朝 [1603-1714] はうんざりするほど詳細にやられました。そして、ミス・ビール先生はクロムウェル鼻屑でしたから、子供の常として熱烈な王党派 [ロイヤリスト] だったわたしは、たえずいらいらしていました。そのコレッジではどこでも [女] 生徒は本を買ってはいけないという奇妙な規則がありました。それはミス・ビールのいわゆる「未消化な知識」に対する彼女自身の恐怖から出てきたのです。わたしたち生徒の大半に関しては、消化、未消化を問わず、吸収された知識の量があまりに多すぎたかもしれないなどと彼女があやぶむ必要はなかったでしょうに。わたしはその規則を破って、こっそりロード大主教 [William Laud 1573-1645 カンタベリー大主教。清教主義の反対し、国事犯として処刑された] の小伝記を買いました。わたしはその本を読み、学び、印をつけて、内的に消化したので

す。後にわたしは再度規則を破って、ブライス [James Bryce 1838-1922 アイルランド生まれの英国の歴史家・政治家・外交官、子爵] の『神聖ローマ帝国』 [Holy Roman Empire 1864] を買いました。ブライス氏はやがてわたしたちを試験することになりました。わたしは背信の行為によって少なからず得をしたわけです。ふつう、わたしたちが常食とすることになっていたのは、授業で取ったノートでした。こうしたノート類は用心深く訂正され、厳しく評を加えられました。それは惨めな窮乏制度でしたが、作文では絶えざる練習を課しました。けれども、二つの点でわたしはチェルトナムに感謝しています。算術と初等数学の教え方は見事でした。どうして割り算で分数をひっくり返すのかをついに理解したのは、たいへんな喜びでした。初めて x を手に入れたときは、世界を新たに支配する術を得たように感じたものです。ただ、わたしの先生方は残念ながらすぐに打ち切ってしまいました——ちょうど、ほんとうの数学が始まるその手前で。そこで、後にケンブリッジで、パートランド・ラッセル [Bertrand Russell 1872-1970 英国の貴族の哲学者・数学者・思想家] 氏が数学の驚くほどの美しさについて講演するのを聞いたとき、わたしは楽園 [パラダイス] の外にいるペリ [Peri ペルシア神話で、悪魔に対して人間の味方をする美しい妖精、墮落した天使の子孫で罪の償いを終えるまで楽園から追放された] のように悔しい気になりました。わたしは数学的な能力がまるでありませんでした。自分が小手先の理解で証明を書いた、そのもろもろの真理の内的な必要性は、わたしには皆目わからなかったものの、先生方はわたしたちを引きずってでも、少なくとも微積分は教えてほしかったものです。

しかし何といても、わたしが感謝しているのは、初等化学の勉強に対してです。わたしどもは実験を使った講義を受けました。しかも、わたしたち少数の生徒は、男子のコレッジの実験室に出かけて、簡単な物質の分析をすることを許可されました。そして、実験を見守るので

す。誰かがヒドロ亜硫酸を棒砂糖に少量注ぎます（たしかヒドロ亜硫酸だったと思うのですが）。わたしの化学の記憶は薄れてしまったもので。すると、たちまち静かな白い砂糖が、黒い活火山みたいに泡立つのです。目の前の事物は二度と同じではない。それらは見かけ通りのものではないことがわかります。そこで、隠された恐ろしい力をあれこれと心に描きます。確固たる大地の全体が、重要なバランスで保たれている、そうした諸力にすぎないと想像することさえできるのです。

わたしは生涯の大半を教育者たちと共に過ごしてきましたが、自分では教育にほとんど関心を抱いていません。男子校にしても女子校にしても、学校が大嫌いです。通常の学齢にあたる八歳から十八歳までの子供は、まとまった意見を形成するには若すぎます。子供たちは馬鹿げた、野蛮な禁制 [タブー] をあれこれ作り上げるだけです。わたしはまた「子供の精神を發展させる」ための計画案とか年上の者の年下の者に対する意識的な種類の個人的感化といったものはすべて嫌いです。子供らには早くから少なくとも三種類の外国語を話させなさい。図書館で自由に拾い読みさせ、自然、芸術、文学の一級品を目に触れさせ、——とりわけ、科学と科学的方法が意味するものを知る機会を与えなさい。そうして、子供たち自身が沈むなり、泳ぐなりに任せればいいのです。なかんずく、かれらのうちに文学趣味を養ってはいけません。——おびただしい質問への答えとして、わたしは失礼ながら、わたしの最初の文学的成果は「雨の祈り [Praying For Rain]」と題する小冊子 [パンフレット] と申し上げます。ミス・ビール先生の肖像画を購入するには、是非とも一ギニー [21シリングに当たる英国の昔の金貨、弁護士・医師などへの謝礼、寄付金、絵画・馬匹・地所などの値段に常用された] 必要でしたが、わたしはそんな額を無心する勇気がなかったのです。そこで、わたしは《宗教冊子協会 [Religious Tract Society]》にわたしの作品を送りつけました。すると、ほとんど折り返

しに、三ギニーの郵便為替が返送されてきました。もしそのまま小冊子執筆を続けていたら、わたしは現在のような貧しい女とはなっていないでしょう。あのすてきな薄い緑の紙の様子を決して忘れはしません。それはわたしには莫大な富でしたが、わたしは罪の意識に悩まされました。父にはこの郵便為替のことを話す勇氣はありませんでした。お金をかせぐ女性に関して、父は旧式の考えを抱いていました。そうすることは家族の男たちの不名誉となることでした。余りの二ギニーを書物に使いたかったのですが、それだけの勇氣はありませんでした。ずっと以前、わたしは嘘をついたため、教会に行かずに家に居残ることになり、《代金の一部を自分のために取っておいた》アナニアとサツピラの話〔新約聖書「使徒行伝 5: 1-6」〕を空で覚えさせられたことがありました。「かれらの死体を運び出した若者たちの足」が自分を待ち受けているような気がしました。そこで、わたしは自分の犠牲を差し出して、三ギニー全部をミス・ビールの肖像画のために送りました。かくて、わたしは家名の汚れをぬぐい去った（そう望みますが）のです。自分が本を書きあげるたびにいつも一冊父に送り届けましたが、その礼状はいつも同じ決まり文句でした。それは「本を送ってくれて有り難う。お母さんも姉妹たちも元気だ。お前の親愛なる父」きっと、父はそれらの本を読まなかったのでしょうか。それらに対する父の気持は、フロイド主義者たちのいわゆる《両面価値〔アンビヴァレント〕》——半ば恥ずかしく、半ば誇らしい感情ではなかったかと思えます。父の死後何年もして、父がまれに家を後にしたときに、旅行鞆にわたしの本をいっぱい詰めて持ち運んだと知って、わたしはたいそう心を動かされました。なぜかしら？ そうですね、やはり父はヨークシャーの男だったのです。「ちょっと仲間」がほしかったのでしょうかね。

およそわたしの父ほど内気な人は見たことがありません。それに、おそろしく《ぼんやり》していました。伝え聞くところによると、父は

結婚してから二年後、母方の祖父の家のあるリンバー・グレインジ〔Limber Grange〕まで馬で出かけて、ミス・エリザベス・ネルソンに面会を求めました。わたしはよく知っていますが、客間に不意の客の姿なぞを認めようものなら、父はぎょっとした顔であたりを見回して、当惑した妻と娘たちと丁重に握手するや、銃声に脅える鹿みたいに姿を消したものです。うちのただっ広い、居心地の悪い古い家では、仕事部屋として知られている一隅を自分の《避難の港》として宛てがっていました。そこには無数の釣竿や旋盤が収まっていて、その旋盤の上で、父は黒檀と象牙の箱を回していました。その部屋に押し入るとしたら、それはよほど勇敢な召使といえたでしょう。わたしの継母でさえ、呼ばれずには敢えて入ろうとしませんでした。父はディナーと昼食の際に《食前の祈り》を捧げましたが、牧師である娘婿が、朝食の前にそれを述べようとしようものなら猛烈に腹を立てました。父が採用し、頑として変えることを拒んだ形式は、彼一流のものでした。それは「われわれがこれから受けとるものに対して、主〔しゅ〕なる神が心から感謝されんことを」というのです。自分の《ぼんやり癖》にかけては、わたしは厳しく抑えています。が、時々ましくじることもあります。こんなことがありましたよ。白モスリンのテニス帽の飾り〔トリミング〕に、カレッジの授業料にあてる筈の十ポンド札〔1ポンドは20シリング、1シリングは12ペンス〕を三枚折りこみました。六ヶ月後に、実を結ばぬ、苦しい搜索をさんざ重ねた揚句、その飾りがほどかれて、やっとお札が顔をのぞかせたのです。

それと比べると、わたしの姉はあまりうまく行きませんでした。牧師の妻として、職を求める若い教区民たちに《人物証明書》を書いてやるのが、日常的な仕事の一部でした。五月学期〔年度末の最終学期〕の終わりには、どのコレッジの指導教師〔チューター〕もこの必須の苦しみを知っています。いかなる形式の文学的作文も姉には激しい苦痛をひき起こしました。

ある日、わたしの姪とわたしは、例の思いつめた顔つきで姉が書き物机に向かっているのに気がつきました。「《ドビンさん [Old Dobbin]》は何をしているのかしら」と姪。（《ドビンさん》というのは、ほんとうに大好きな母親に対する彼女の尊称なのです。）「あの顔付きからすると、推薦状を書いているのよ」とわたし。「行って、見てくる」と姪。母親の肩越しに、姪の目に入ったのは「若猫ヴェルヴェット・ブラウン氏（小さな姪の猫の実際の名前。当時、余分と思われていたのです）の勤め口を探しています。わたくしはあらゆる点から見て、彼を心から推薦します。なにしろネズミ捕りは上手だし、情愛こまやかで、容姿、習性はさっぱりしています。彼は牧師の家庭で、この数ヶ月暮らしていました」さて、ここで、彼女は一休みを入れて、ペンを宙に、インスピレーションを求めていたのです。そして、長い含み笑いによって、少しずつ現実に戻されました。

姉に対して公平に言えば、「ヴェルヴェット・ブラウン氏」は牧師館の家庭生活で、大きな役割を果たしたことを説明すべきでしょう。結局、彼は死が訪れるまで、そこを離れませんでした。彼はたいへん威厳のある猫でした。尻尾を立てて、わたしの義兄の後をいつも小走りについて、彼の巡回地区をまわりました。その姿が見えないと、家中が上を下への大騒ぎです。小さな甥は、その世代の流儀で、母親にふつうは親切で、寛大でした。一度、彼女が（正直なところ）息子にそうとう「ガミガミ言って」いたことがあったのを思い出します。すると、彼はやさしくこう言いました。「ほら、ほら。母さん、それでいいんだよ」ところが、姉が怒って「いったい全体あの猫はどこへ行ってしまったの？」と言うと、彼はたしなめるように相手を見て、答えました。「母さん、ヴェルヴェット・ブラウン氏はちょっと散歩に出かけたんだ。夕飯には戻ってくるから、魚を少々とクリーム一皿を取っておいたほうがいいよ」わたしの一番大切にしている持物の一つは、ヴェルヴェット・ブラウンの写真で、わたしは今だ

にそれを持っています。後ろ脚で立ち、右手を差し出している姿が撮られています。これは、わたしの義兄が説教壇の上で取る、お気に入りの仕草でした。しかしながら、ああ！ ヴェルヴェット・ブラウン氏はフランス人のいわゆる「真面目な猫 [un chat sérieux]」ではなかったのです。ある晩、彼は外出して、そのまま戻って来ませんでした。姉のラテン語解釈に時おり説得力を欠けさせたのは、こうした《ほんやり癖》であって、わたしが当時愚かにも考えたように、知力の欠如ではなかったのです。ラテン語の練習帳のわびしい荒野を、彼女がよろよろ歩いてたときの彼女の音楽的な声を、わたしは今なお耳にすることができます。「鋭い馬が鈍い拍車を駆り立てた」[もちろん「鋭い拍車が鈍い馬を駆り立てた」が正しい] 姉の分別力はいつも父親なみ、羊毛を集めるように取り留めがありませんでした。しかも、ここには集めようにも羊毛がなかったのです。彼女なら、今だって「その壁はバルブスを築き上げた」[「バルブスがその壁を築き上げた」が正しい。バルブスについては、スエトニウス『ローマ皇帝伝』カエサルおよびアウグストゥスの巻参照]とやりかねませんよ。

わたしの父がヨークシャーを去ったのは、スカープラ [Scarbro] とワイトビー [Whitby] 間を結ぶ鉄道の支線が、家から一マイル内にまで迫ってきたためです。それで旅行客、車の群、ガス灯、その他あらゆる郊外住宅地の汚染をもたらすことを恐れたのです。父は心配過剰だったと思います。わたしたちはその地を離れましたが、十年ほど後に、わたしは故郷の友人たちを訪れました。その折、たまたま小包の書籍を取りに、そのムアランドの小駅まで行く機会がありました。ちいさい汽車が煙を吐きはき、現れました。車掌車が開いて、小包が数個ほうり投げられました。それから一人の乗客、大きな灰色の羊犬が歩み寄り、駅長がうやうやしく挨拶しました。ヨークシャーは犬、とりわけ狩猟犬の天国 [パラダイス] です。ヨーク駅のプラットホームに狩猟犬が群がるのを見た

ことがあります。それは八月十二日のころで、持主たちが無視されるのをよそに、その飼い犬たちは熱心な赤帽たちに細かく世話されていたものです。それにしても、あらゆる犬はしかるべき尊敬をもって扱われます。かつて、このわたしは、でかいセント・バーナード犬がヨークシャーから自宅に帰るのに随行する名誉に浴したことがあります。友人とわたくしは、かの偉

い同伴者に敬意を表して、一等車で行きました。車掌はわれわれ三人を見ると、にやりとして言いました。「ひょっとして、犬さんは見知らぬ人と一緒にない方ががいいでしょ」そして、その客車の表示札をひょいと《使用中》にするや、そのまま行ってしまいました。きっと、チップのことなぞすっかり忘れてしまったのでしょう。